

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(70) 平成15年6月1日

新井白石シリーズ

新井白石の『藩翰譜』(Q281-19及びK341/1)

新井白石(明暦3(1657)年～享保10(1715)年)は、江戸時代の儒学者であり、歴史家であり、正徳の治をおこなった政治家です。就学者の白石の系統は朱子学派に属しますが、当時の多くの儒者が専ら漢籍上の知識を持つにとどまったのに対し、白石は日本の文献についても強い関心と豊かな知識を持ち、これに合理的・実証的態度で臨み、多くの著作で独自の見解を表明しました。白石は、上に立つ為政者がまず自ら高い徳を身につけ、「道」に則った政治を率先して行うことが、幕府安定の根幹であるという信念の持ち、第6代将軍家宣が中国古代の聖人の王とされる堯・舜のような君主になること、仁愛の精神をもって人民に望むことを念願して講義を行いました。彼の講義は19年間に1299日に及んだといわれています。家宣への進講案をまとめたものとして、撰閣政治の成立から、政権の移行をたどり家康の政権確立の由来を説いた『読史余論』があり、各大名家の事績を系統的に述べた『藩翰譜』があります。

白石の政治理念は高遠な理想主義で、しかも性格や言動にかどのある彼は、反対意見を徹底的に論破しました。このため時の老中から「鬼」の異名をつけられて、孤立しており、享保元(1716)年に吉宗が8代将軍を継ぐと、政治的地位を失いました。

『藩翰譜』は、新井白石の代表的著書としてよく知られています。『温故知新』69号(SZ02/17)で紹介した『折りたく柴の記』には、「元禄13(1700)年庚辰の年12月11日、国初より此かた、其封禄万石以上の人々の事ども、進講の暇あらんをりをりに、如何にもしるして参らせよかしなど、仰せくだされしに、明けの年辛巳(1701)の正月11日、其事を以て仰下さる。」と、将軍家の講義の中で暇があれば全国1万石以上の大名家についてまとめよという将軍家の命令があったと記してあります。さらに「事は慶長5(1600)年に始て、延宝8(1680)年に至るまで、80年の間、始封・襲封および廃除等、凡337家、其書たる正編十巻、附録二巻、凡例目録共一巻、通計十三巻を分かちて二十冊となし、自ら浄書功終りぬれば、明る元禄15(1702)年壬午の2月29日に進呈す。是より又書の名をば、御みずから選み給ひて藩翰譜と題せらる。」ともあります。つまり、慶長5(1600)年から、延宝8(1680)年までの80年間の大名家の始封・襲封・廃除をまとめ、将軍家に提出し、将軍家宣がこれに『藩翰譜』という資料名をつけたことが記されています。収録の諸大名の排列の順序は、越前・尾張・紀伊・水戸・保科・甲府・館林・松平諸家に始まり、以下譜代大名・外様大名の順とし、さらに附録では廃絶の諸家を収録してあります。

久能文庫所蔵資料は、写本32冊(上30巻中30巻下32巻の計92巻と首巻)からなり、資料の大きさは縦23.5cm横16.9cmと縦22.7cm横16.2cmの2種類があります。また、貴重書庫には大槻如電(1845～1931)の校訂による『校刻・藩翰譜』の巻4～7までを所蔵しています。

【参考図書】

『新編藩翰譜』(288.2/100)

『江戸幕府編纂物 解説編』(027.2/13)

『新井白石』(281.08/101/198)